外報摘要

第三拾三回

263/1-4
1

414
A 796
I

外報摘要第三十三回目次

一 英國ノ威海衛占領ト其前後ノ各國輿論
一 滿州地方ニ於ケル露國

以上

明治三十一年六月十三日脱稿

大正十一年四月
大隈侯爵家御寄贈

早稲田大学図書

英國ノ威海衛占領ト其前後ノ各國輿論

其一、占領前ニ於ケル輿論

「露獨佛ノ要求ニ次キ英國カ渤海湾ニ於ケル權力平衡ヲ維持セン為メ四月二日ヲ以テ其意ヲ在清公使サー、クラウド、マクドナルドニ致シ、德理衙門ニ威海衛借入レヲ申込マシメタリトノ風評一度北京ニ起ルヤ、各國ノ耳目翕然トシテ此所ニ注ギ或ハ英國ノ挙措ニ忿怒スルアリ或ハ放言醒スルアリ或ハ又其成行ヲ揣摩臆測スルモノアリ」

「露國ノ各新聞ハ悉ク英國ノ談挙措ヲ忿怒シ支那政府ニ向ツテハ其要求ヲ拒絶ス可キヲ諷諫シ、特ニ日本ニ對

シテハ之ニ同情ヲ寄セサルヲ煽動スルノ意ヲ暗示セリ、曰ク抑北京條約ハ日露ノ親善ヲ害スルモノニアラス否寧ロ之カ深厚ヲ圖ルノ媒タリ、露清條約又然リ、而シテ日本ハ能ク露國ノ意ヲ諒シ、其不凍港ヲ占ムル希望ノ如キハ必要ニシテ且正当ナルヲ知ルク故ニ、毫モ之ヲ障害セサルノミナラス却テ益彼我ノ親交ヲ効カメ、且之ニ由テ自己ノ利ヲ進メント期スルモノ、如シ云々

墺國、維也納ノ輿論ハ日本ハ能ク英ニ同意シ英ヲシテ其慾望ヲ遂ケシム可キ乎、將自己ノ力足ラサルヨリ忍ンテ之ヲ默認ス可キ乎、今俄ニ之ヲ断スル能ハサルヒ、而モ今日ニ於タル日本ハ建造中ナル軍艦ノ未タ整備セサル日本極東多事ノ地位ニ立テル日本ノ得策ハ露ト共ニ相携ヘ英ヲ排斥スルニ在リ若シ夫レ日英同盟ノ如キハ空中樓閣ヲ築クト何ソ擇マン、蓋シ日英同盟ノ起ル所以ハ支那分割ヲ防クニアリトセンカ獨露ノ占領前早ク既ニ之カ完成ヲ見サルノ理アラサレハナリ云々

獨國、英國カ咸海衛ヲ占領セントスルノ報傳ハルヤ、伯林外交社會ニ於テハ一般ニ驚愕ヲ惹起セリ、就中新聞紙ニ於テ其甚シキヲ見ル、

「ベルリナル、ノイエステ、ナハリヒテン」曰ク、是レ第一ニ我獨

逸ヲシテ最早タクノ要求ヲ山東ニ為ス能ハサラシメ第二ニ露國ノ旅順口ニ對シテハ亞二ノ障壁トナリ、特ニ膠州湾ノ軍事上ニ於ケル價値ハ之カ為メニ悉皆剝奪セラレン、是レ我國ノ傍觀ス可カラサル所ナリト

「タゲブラット」ハ曰ク、英國ノ此行為ハ我獨逸ノ為ニ頗ル有害ナリ尓今吾人ハ英國ヲ見ルニ山東ノ競敵ヲ以テセサル可カラス、吾人ハ切ニ政府ニ望ム庶幾クハ吾人ヲシテ又再ヒ亜弗利加ノ轍ヲ踏マシメサルヲ去々

獨リ其調ヲ異セシハ「フランクフルテル」ナリ曰ク、自由貿易ノ基礎トシテ政洲各國カ東方亞細亞ニ獲奪ヲ逞フスルハ総テ高葉國民ノ歓迎スル所吾人亦之ヲ賛ス、故ニ吾人ハ英國ノ威海衛ヲ以テ大ニ満足ヲ表スト

佛國、「タム」ハ威海衛占領ハ曾テバルフオール氏カ英國ハ支那ニ領地ヲ獲得スル意ナシトノ語ヲ引キテ其行為ノ矛盾ヲ責メ、「レピユ ブリック、フランセイ」ハ日本ノ之ヲ兼諾スルヤ否ヤヲ疑ヒ更ニ之レ獨逸ト紛爭ヲ醸スモノ何トナレハ是レ山東ノ獨逸領ト並行セサルモノアレハナリト論セリ

然レ氏各新聞紙悉ク其要求ノ速ニ貫徹ス可キヲ期スルモノニ似タリ(ロ)

其二、バルフオール氏ノ占領政策及デヴオンシヤイア公ノ附言

「先ヅ英國ハ其對清政策ヲ議會ニ公言スヲ可シトノ風聞四方ニ喧傳シ各國之カ消息ヲ待チツヽアリシニ果シテ四月六日ヲ以テ大英總裁バルフオール氏之ヲ公言セリ、曰ク英國ハ縱令威海衛ヲ得ルモ專ラ之ヲ商港トナスノ意アルモノニアラス唯之ヲ以テ如何ナル強國ニモ渤海灣ニ權力ヲ擅ニセシメサラントスルニアリ、予ハ清國カ其廣大ナル領土ニ對シ單ニ名義上ノミナラス實際上ノ主權ヲ維持センヿヲ望ム而シテ又予ハ英獨ハ共ニ利

害ヲ同フスルヨリ其快同ス可キヲ望ムヤ切ナリ、英國ハ露國ノ商業政策ニ對シ毫モ故障ヲ入ル可キ道理ナシ、況トモ不幸ニシテ露國ハ旅順口ヲ得ルヲ以テ必要ト思考セリ、元來旅順ノ地タル純粹ノ海軍港ニシテ此地ノ占領ハ北京政府ニ對シ勢力ヲ及ホス頗ル大ニ從テ各國權力ノ平衡ヲ破ルモノアルヲ以テ、英國ハ露國ニシテ若シ旅順ノ占領ノ意ヲ繼スニ於テハ英國決シテ渤海灣ノ何如ナル部分ヲモ占領セサルヘキヲ誓ヒテ抗議ヲ試ミタリ、況ルニ此抗議ハ容レラレサリシヲ以テ英國ハ威海衛占領ノ止ムヘカラサルニ到レリ去ヤ

又デヴオンシヤイア公ハ貴族院ニ於テ之ニ附言シテ曰ク
威海衛ノ貸受ニ付テハ日本ヨリ何等ノ反對起ルヿシ
トモ思ハレス且清國ハ此貸渡ヲ諾スルト共ニ清國軍艦
ニ對シ利便ヲ與ヘラレンコト及清國海軍士官ハ英國監
督ノ下ニ教練サルヘキヿヲ請求シタリトシ(ハ)
其三、占領後ニ於ケル各國輿論
「其後支那ノ義諾ト共ニ英國カ對清政策ヲ公言スルヤ各國
ノ輿論頓ニ一変セリ特ニ獨逸ノ如キハ其最タリ
獨國、「ノイエフライプレッス」ヲ始メ「アルゲマイネ、ザイツン
グ」及「ドイチエザイツング」等異口同調バルフオール氏ノ

言ヲ賛シ英國ノ擧措ヲ賞揚スルノ外他辞ナク、就中「ケ
ルニシエ、ザイツング」最モ同情ヲ寄與セリ曰ク、
英國カ這回威海衛ヲ占領セシハ獨逸ニ於テ故障ヲ唱ヘ
サルノミナラス却テ之ヲ賀スルモノナリ、何トナレハ之レ英
國カ渤海湾ニ於ケル權力平衡ヲ恢復シタルモノナレハ
ナリ、而シテ吾人カ慥カナル筋ヨリ聞ク處ニヨレハ彼露國
カ所謂日露親交云々ノ如キハ悉ク誣妄ニ屬セリ若シ、日
本ニシテ他ト親交ヲ保タントスルモノアリトセハ即英國ヲ
措テ他ニアラスト云々
佛國、「タム」ハ獨逸ハ英國ノ威海衛占領ニ對シ寧ロ同情

ヲ表スヿ可シ、然レトモ之ヲ以テ直ニ伯林政府ハ露西亞政策ヲ
沮害セントスル英國政策ニ與ミスルモノト推測スルハ非ナリト
論シ、更ニ日本ニ就テ曰ク、日本ノ態度ハ頗ル曖昧模糊ノ
中ニアリト雖モ彼カ威海衛ヲ放棄スルハ遺憾忍フ能ハサル
所ナラン、蓋シ彼カ之ヲ放棄スルハ東亞ノ大陸ニ於ケル唯一
ノ立脚地ヲ失フモノナレハナリ、而モ彼カ其堪ユヘカラサルニ
堪ヘシ所以ノモノハ惟フニ他ニ約スルアリテ然ルニアラサルカ、
頃日デヴオンシヤイア公ノ上院ニ於ケル諷言トカヒ、「數日前
マテハ英國ノ挙措ヲ恨ミ縱令償金皆濟後ト雖モ尚威海衛
維持ヲ絶叫セシ日本政府カ俄ニ四月二日ノ内閣会議ヲ以テ

消極的政策ヲ取リ英國ノ運動ニ干渉セサルニ決セシトカ
ヒ、見来レハ歴々トシテ吾人カ推測ノ誤ラサルヲ証スルモノ
アリ、」(ロ)而シテ吾人今茲其密約ヲ揣摩スルニ恐ラクハ
異日極東ニ於テ日本ノ或國ト抵觸セシ場合ニ英之ヲ
保助スヿ可シトカフニアラサルナキカト」(ホ)
「露西亞、英國ノ威海衛借用ハ露西亞新聞社會ニ益劇甚
ナル強辯及忿怒ヲ惹起セリ、今煩ヲ避ケ其重モナルモノ
ヽ即チノボエ、ウレミヤノ所論ヲ示サン曰ク、
英國カ之ヲ要求セシ所以ノモノハ我ヲ凌キ北支那ニ於テ優
勢ヲ占メンカ為ニ外ナラス、故ニ露西亞ハ如今英國カ其

兵力ヲ該方面ニ増大スルヲ推度スルト共ニ、自己モ亦之カ膨脹ヲ計リ其抵觸ヲ覚悟セサル可カラス豈啻ニ東方亞細亞ニ於ケル艦隊ヲ増加ストノミニハンヤ、英國這般ノ挙措ハ全ク千八百九十五年亞富汗斯垣ニ関スル英露條約破棄ト見テ可ナリ、西方亞細亞ニアッテハ我ハ攻襲ノ位地ニ立チ英ハ防禦ノ地位ニアルモ東方亞細亞ニアッテハ其位地全然轉倒セリ、要スルニ英國ノ占領ハ名ハ権力平衡ニ存スルモ實ハ我ノ要路ヲ杜絶スルニアリ、露国タルモノ之ニ応スルノ策ヲ施サヽルヘカラス云々

其他ノ新聞ニフ所多少ノ差アルモ反英主義タルヤ一ナリ、唯

此中ニ奇論ヲ為セシハフノボスチ「ノミ」(ハ)曰ク

「之レ寧ロ英露接近ノ好機會トシハサルヘカラス、左レハ吾人ハ政府当局者ニ望ムニ、英露ハ如何ニシテ親交スヘキカノ策ヲ考覈ムルト共ニ、俱ニ相携ヘテ極東ニ於ケル文化ノ啟発ヲ謀ランコトヲ」

摘要新聞

(イ) 四月四日スタンダード

(ロ) 四月五日同上

(ハ) 四月七日八日タイムス

(ニ) 四月四日五日スタンダード

(ホ) 四月六日七日同上
(ヘ) 四月八日同上
(ト) 四月九日同上

滿州地方ニ於ケル露國

露國ノ對滿州政策ハ今ヤ明カニ發表セラレタルヲ以テ此際東部西比利亞ニ於ケル軍隊ノ配置及運輸交通ノ手段等ニ就キ考覈スルノ寧ロ必要ナルヲ知ル、

支那ノ北境タル該地方ハ約一千六百哩アルガン河流ヲ以テ限界トシ其黑龍江ト接續スル点ニ到リ江ニ沿フテ東北境ノ終極点タルカバロフカニ迨ヒ更ニウソリーニ沿フテ南曲シ凡ソ二百五十哩ニシテ西ニ向ヒプロツスエウト湾ヲ去ル甚タ遠カラサル日本海ニ潮スルチユーメン河上ノ奉天府ニ到テ終ル、今試ニ亞細亞地圖ヲ繙カン乎一瞥ノ下西比利亞カ滿州ノ大部分ヲ侵蝕シ其西方ニ於テハ三百哩東

方ニ於テハ五百哩ニ亘リ直ニ露領ニ侵入セルヲ知悉ス可シ、而シテ西比亞鉄道ハバイカル湖ノ南岸ヲ掠メテシルカ河岸ニ沿ヒアルガンニ接合スルニ迨ヒ此所ニ黒龍線ヲ通シテカバロフカニ到リ急轉直下シテ南ノ方浦塩斯德ニ達ス、由是観之該線路ハ殆ント一千一百哩間滿州境界ニ沿接セルモノト云フ可シ、而シテカバロフカヨリ浦塩斯德ニ至ル約四百八十五哩間ノ鉄道ハ早ク既ニ竣工シ、且目下計畫中ナル滿州支線ハシルカ河ノストレテンスクヲ起点トシアルガン河并ニキンガン連山ヲ横断シテペトウーナニ達シ南折シテ遼東半島ニ達スルマテニハ又吉林ニ及フ

可ク而モ其完成期ハ遠カラサラン、加フルニ夏期五月十五日ヨリ十月十五日ニ至ル五ヶ月間ハ非常ニ廣大ニシテ且完全ナル水路交通ノ便ヲ有シ西比利亞鉄道ノ終極点タルカバロフカヨリ黒龍江ヲ航シテシルカニ溯リストレテンスクニ到ル千百哩間ハ幾多ノ蒸汽船及搭貨船ヲ浮フルヲ得可シ、南ク黒龍汽船會社ノ所有船ハ現在少ナクモ蒸汽船四十隻搭貨船一百六十隻ニシテ西比利亞鉄道廳モ近々夥多ノ小船隊ヲ作ルノ計畫アリト、以上陳述セシ水路ハ竟ニ陸地境界ニ接スルモ此間要用ナル運河ノ滿州中心ヲ横断シテ黒龍江ニ入ルモノアリ松

花江即是レナリ、ズンガリー江ハミカイロ、セムノホスケエヤニ於テ黒龍江ニ合シ千八百九十四年数度ノ蒸汽船始メテ之ヲ航シテペトウーナニ到リ千八百九十七年遂ニ吉林迫達セリ、往ルニペトウーナ附近ニ於ケルツイツイハー輓近開航セラレ之レヨリメルゲンニ達スルヲ得ルモノヽ如シ、メルゲンハブラゴヴエスチエンスクヲ距ル約一百五十哩ニアリ、左レハ満州鉄道ノ材料ハ總テ此等ノ水路ニヨリテ運送セラル可ク従テ旅順ズンガリー間ノ鉄道モ同時ニ着手セラレンカヽ三姓ニテ松花江ト合セルブンカモ内地艇ヲ以テニンタニ到ルヲ得可ク幾多行商ノ通路

ハ西比利亞ト満州トヲ連絡シストレンスクヨリスタロオ、スムハイトライ等ヲ経テペーウーナ及吉林ニ達スルヲ得可シ、然レトモ該路ハ頗ル長遠且中ニ乏水ノ荒漠地モアリテ困難ナリトセンカ、別ニブラゴベスチエンスクヨリツイツイハーニ到リ更ニ南方ニ向フモノアルヲ以テ露西亞之ニヨルモ尚糧食兵器ヲ運搬スルヲ得可シ、其他東部ニ於ケル露港ポルタフスクヨリ吉林ニ至ル三百七十五哩ノ一道アリ十五日ヲ以テ優ニ往来シ得可ク又別ニ奉天府ニ達スルモノアルカ故ニ、總テ州ノ道路ハ盛夏間縦令通過シ難キフアルモ冬時ハ容易ニ往来シ得可ク水路交通ト陸路往返

トハ夏冬相俟テ行ハル、ヲ得可シ

更ニ東部西比利亜ニ於ケル露國軍隊ヲ見ンカ其有事ノ日ニ際シ組織セラルヘキ諸隊左ノ如シ

騎兵三十八聯隊、砲兵十七中隊、歩兵三十七大隊、外屯田歩兵五大隊同砲兵七團体及浦塩斯德ノ要塞防備ニ充テタル一隊ノ工兵水雷兵有リ、黒龍江ロナルニコライスクニ屯營セル歩兵一大隊及屯田砲兵ノ一團体ヲ除キ路ノ軍隊ハ総テ二大部ニ分タレ満州ノ東西境域ニ分備セラル、又浦塩斯德附近并ニ其附近ノ要塞鉄道横断地タルグラフスカヤ、アイマン、カバロフカ等ノ方面ニ於テハ騎

兵十聯隊砲兵十三大隊歩兵十八大隊有リ極西部ナルヴエルクニー、ウヂンスク及シルカ河岸ニ於テハ騎兵十八聯隊砲兵二團隊歩兵十七大隊ヲ有シ、黒龍江上ノ要港ブラコヘスチエンスク及エカテリノ、ニコルスカヤニ於テハ各歩兵二大隊騎兵六聯隊及騎兵二聯隊餘ヲ有ス、而シテウソリー軍ノ総督府ハ浦塩港ヲ去ル遠カラサルニコルスクニアリ

最モ右軍隊ノ性質ハ同一ナラス何トナレハ或ハバイカル地方ノコサック兵(騎兵及砲兵)アリ或ハ東部西比利亞ノ歩兵旅團等アレハナリ、然レモヴエルクニイ、ウヂンスク等ヨ

リ奉天府ニ到ルノ間千八百哩ニ配置セラレタル者ハ緩急
ニ応シ速ニ満州ノ各部ニ侵入スルヲ得可シ、カフルニ露國
ニシテ黒龍江及松花江ノ航路ヲ開通シ巧ニ水路交通ノ
便ヲ利用スルト共ニ満州支線開始ヲ計ラハ満州ハ夫レ遂
ニ露国ノモノタラン、而モ飜テ浦塩斯德附近ニ集中セラル
ヘキ渠ノ陸兵ヲ見ハ約二万人ニ過キサルノミナラス、同港ノ
結氷溶解後ニ至ラスンハ海路本國ヨリ急援ヲ仰ク能ハサ
ルハ勿論彼シルカ河黒龍江等ノ航路ニシテ開通セラルヽ
ニアラサレハ此等地方ノ軍隊ヲモ集中スル能ハサルヲ何以
セン、然ルニ日本カ朝鮮及遼東半島ニ容易ニ大軍隊ヲ

上陸シ得ルヲ考ヘハ極東ノ天地ニ雄ヲ示サントスル露
國ノ寧日ナキヤ明ナリ、即知ル先頃発表セシ露国海軍
的計畫ノ契意果シテ那邊ニ存スルカヲ
因言　露国ノ海軍的計畫トハ曾テ「ニューヨーク」ヘラル
ドニ見ヘシバルチック、ブラック海ヲ二運河開鑿ノ挙等
ヲ指示スルニアラサルナキカ

摘要

四月廿二日廿三日タイムス